

【実践報告④】

命輝く生徒の育成

～学ぶ意欲を高め、学び合いを創り出す授業づくり～

幸田町立幸田中学校

1 はじめに

幸田中学校は幸田町の中央に位置し、全校生徒 518 名が在籍している。通常学級 15 クラス、特別支援学級 5 クラスの合計 20 クラスで、三つの小学校から入学してくる中規模校である。また、幸田町で一番歴史のある中学校であり、町内全域に多くの卒業生が住み、本校を支えている。

本校の特色の一つに「全校で一つのことを創り上げる」という伝統がある。その伝統の下、生徒会活動の一つとして、生徒会執行部や各学年のリーダーたちを中心に企画、実行して取り組む全校ダンスと全校合唱に打ち込み、地域や保護者へ発信している。

2 実践

(1) 実態の把握と研究仮説

研究を進めるにあたり、生徒たちの実態と教師の願いを調査した。生徒たちは、「難しいことでも失敗を恐れないで何事にも挑戦している」の項目において、4割ほどが「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」と否定的に答え、挑戦をためらう姿が浮かんできた(資料1)。そんな生徒たちの実態を感じ取っていた教師たちの願いは、「課題に果敢に挑戦し、諦めず取り組ませたい」というものであった。

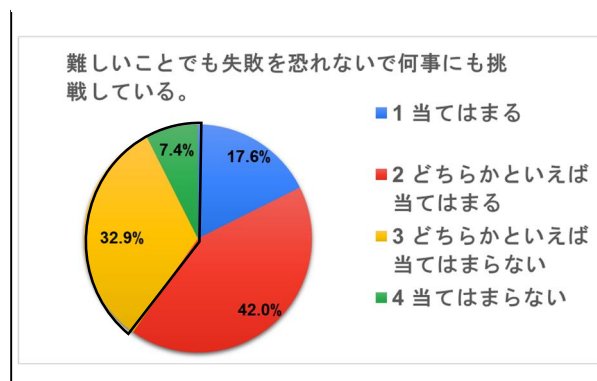
そこで、本校の教育目標である「命輝く学校」を目指し、研究主題を「命輝く生徒の育成～学ぶ意欲を高め、学び合いを創り出す授業づくり～」とし、研究仮説を「生徒の実態や考えを大切に単元を構想し、学びの期待を膨らませる手だてを講じれば、自他の学びを深め、高め合うことができるであろう」として、実践に取り組んだ。

(2) 本校の「AARサイクル」

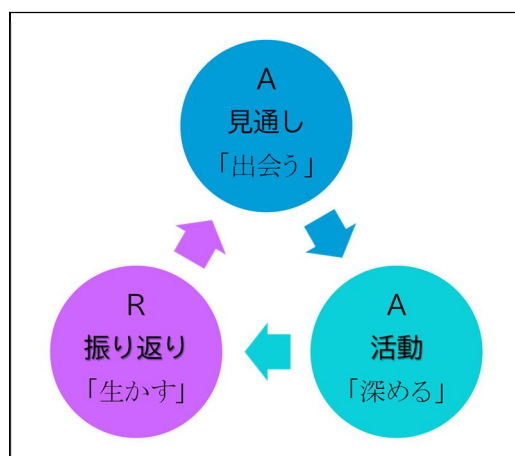
実践にあたり、生徒自らが学びを進めていくためには、生徒の思考に沿った学習展開が大切であると考え、生徒の気付きや疑問に寄り添った単元の構想に重点を置いた。

単元の始まりである「出会う」段階では、教材との出会わせ方を工夫し、出会った際の疑問やこれから学ぶことへの期待がもてるようにした。中盤の「深める」段階では、学びが深まるよう、立ち止まって考えたり、仲間と協働して学びを進めたりできる場を設定するようにした。終盤の「生かす」段階では、単元を振り返りながら、自分の学びを実感し、次の学びへの意欲につなげられるようにした(資料2)。

【資料1 生徒の現状把握シート結果】



【資料2 単元各段階の「AARサイクル」】



(3) 研究1年目の実践

研究1年目は単元の導入に重点を置いて実践に取り組んだ。

2年生理科「電流と磁界」では、ワイヤレス充電器という生徒にとって身近なものを教材として扱ったことで、学習内容への興味・関心が高まった。充電器を実際に分解することで、電磁誘導への理解を深め、ICカードなどにも利用されていることに気が付くことができた。

1年生保健体育科「バレーボール」では、プロのバレーボール選手を講師に招いた。プロの動きを動画で撮影し、プロの方が大切に話された「思いやり」をキーワードに常に自分たちとプロのプレーを見比べながら学習に取り組むことで、単元を貫く生徒の意欲を生み出した(資料3)。二つの実践より、導入の重要性を改めて強く感じた。

【資料3 動画を確認する生徒】



(4) 研究2年目の実践

ア きらりタイムの設定

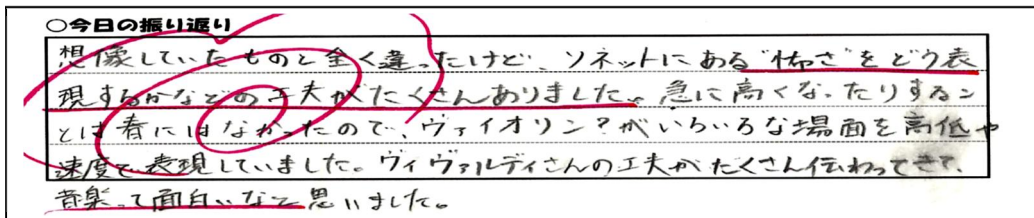
研究2年目は、単元の中盤「深める」段階を中心に取り組み、「きらりタイム」を設定した。「きらりタイム」とは、学びの深まりや広がりを感じたとき、疑問の解決や解決への見通しを得たとき、新たな疑問が生まれたときなど、「学びの深化を生徒自身が実感したとき」とし、生徒が生き生きと学びに向かう関わり合いの場を設定した。学びの深化を生み出すための「教師の手だて」を、「きらりポイント」として整理した。

イ 1年生音楽科「鑑賞 ヴィヴァルディ『四季』から」の実践

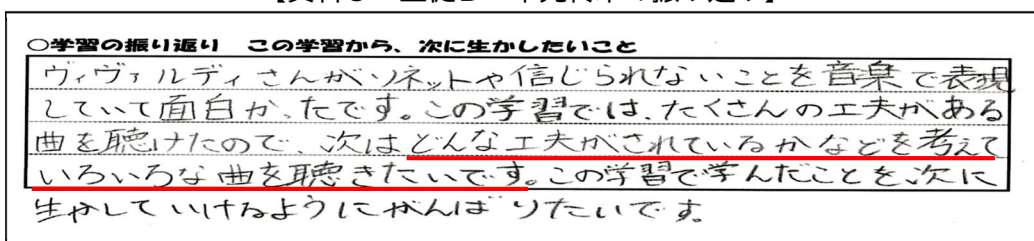
鑑賞の学習で、

生徒は「夏」のメロディを自分たちで想像して創作した後、本時の「きらりポイント」であるヴィヴァルディが作曲した本物の「夏」のメロディに出会った。生徒のイメージする明るく楽しい夏のイメージとはかけ

【資料4 生徒B 第5時間目の振り返り】



【資料5 生徒B 単元終末の振り返り】



離れた曲調に「激しい、怖い」といった印象を口にするほど衝撃を受けていた。そして、稲妻が高い音で表されていることに気付き、ドンとする音で雷が落ちること、リズムが速くなることで稲光が増えていくことなど、音楽の特徴を理解して説明できた。

生徒Bの振り返りの中には、「『怖さ』をどう表現するかなどの工夫がたくさんありました。…中略…音楽って面白いな」と記述し、音楽そのものの魅力に気が付く姿が見られた(資料4)。

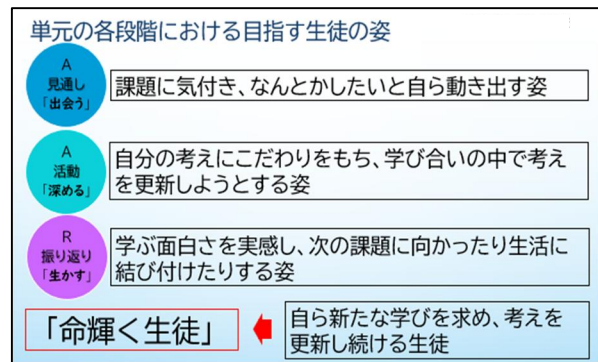
また、単元終末では、ヴィヴァルディが音楽でいろいろな表現をしていることを理解したことで、「どんな工夫がされているかなどを考えていろいろな曲を聴きたい」とあり、単元を通して音楽との向き合い方を更新している姿があった(資料5)。

(5) 研究3年目の実践

ア 単元の各段階における目指す生徒の設定

本年度は、各段階における目指す生徒の姿をより具体的に設定した(資料6)。各教科の実践において、各段階で設定した姿を生み出していくために必要な手だてや単元の流れを検討した。研究初年度より掲げてきた「命輝く生徒」もより具体的な姿で定義し、「自ら新たな学びを求め、考えを更新し続ける生徒」とし、実践に取り組んだ。

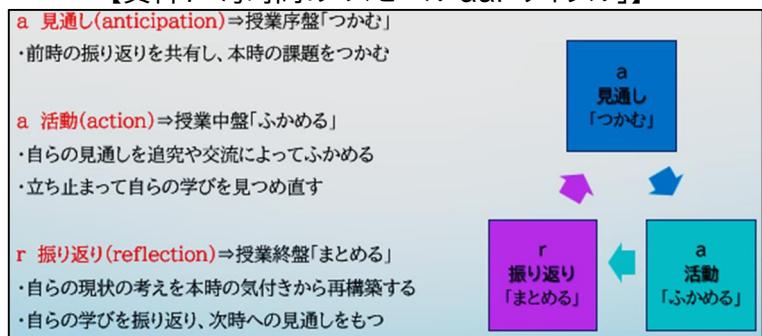
【資料6 単元の各段階における目指す生徒の姿】



イ 毎授業の「スモール a a r サイクル」

【資料7 毎時間の「スモール aar サイクル」】

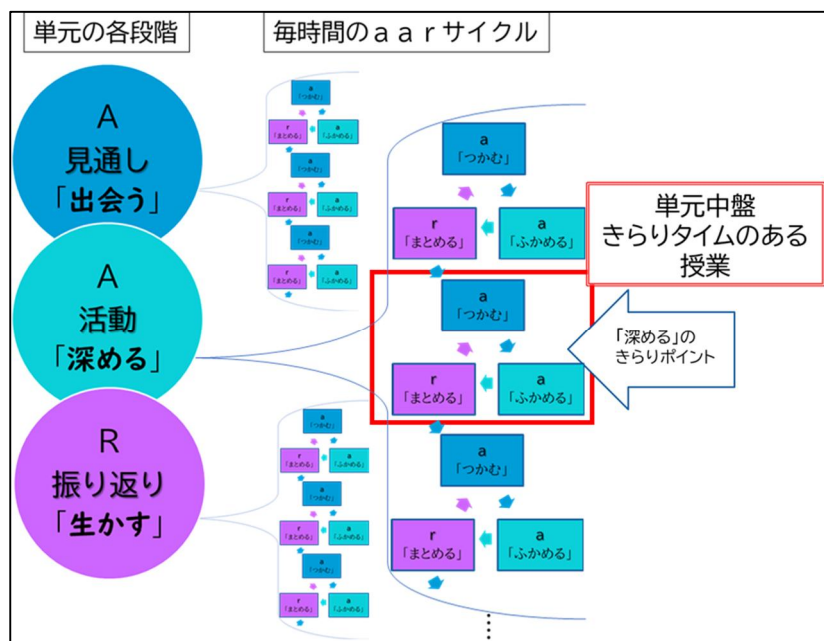
本年度は、これまで単元レベルで捉えていたAARサイクルを毎時間の授業レベルにおいても考え方を当てはめ、「スモール a a r サイクル」と定義して新たに実践を進めた(※以下毎時間の「スモール a a r サイクル」を「a a r サイクル」と表記する)(資料7)。授業と授業のサイクルをつなぐ上で、本時の最後に必ず振り返りを記述すること、次時のめあては前時の振り返りの内容から提示することを徹底した。



ウ 単元中盤「深める」のきらりタイムと「a a r サイクル」のつながり

昨年度までは、単元づくりに焦点を当てた「AARサイクル」について実践を重ねてきた。本年度は、単元の中で繰り返される1時間の授業における「a a r サイクル」に力点を置いた。中でも、令和6年度実践より取り組んできた、単元の「深める」段階の「きらりタイム」に着目し、「a a r サイクル」とのつながりを検討しながら実践を進めてきた(資料8)。毎時間、繰り返される「a a r サイクル」によって単元の段階が進んでいく。その中で、単元中盤に教師が「深める」のきらりポイントを講じる場面では、手だてによって、生徒がこれまで学習し、生み出してきた考えに新たな視点や気づきが生じ、立ち止まって考える姿が表出される。そして、生徒が自分自身の考えを振り返りながら、新たな自分の考えを生み出していこうとする姿が表出される。この場面では、生徒が自分自身の考えを振り返る「r」と新たな考えを生み出していこうとする「a」が生じ、「きらりポイント」の手だてによって1時間の授業の中に二回しの「a a r サイクル」が成立するのではないかと仮説を改めて立て実践を行った。

【資料8 単元構想と「aar サイクル」のつながり】



エ 1年生国語科「思いを引き立たせる間接表現『大人になれなかった弟たちに……』から」の実践前ページ(5)ウの仮説を基に、1年生国語科「思いを引き立たせる間接表現『大人になれなかった弟たちに……』から」の実践を例に単元中盤「深める」のきらりタイムと「a a r サイクル」のつながりについて資料9を基に説明する。

前時までに生徒は、この作品が「つらい」「かなしい」と感じた理由について考えてきた。

【資料9 令和7年度1時間の授業における二回しの「a a r サイクル」実践例】

六月十八日 振り返り
今日の授業では、米倉さんの**比喩表現**を使っていることで考えが深まるというところを考えました。比喩表現で話の内容が変わり、悲しくなることが分かり、良かったです。感情を書かずに想いを伝えているので先生が見せてくれた文章ももう少しそこを工夫するのいいと思いました。

再度自分の考えを振り返り、考えを構築する時間

【深めるのきらりポイント】
表現の工夫に気付かせるために、作品と同じ内容で、間接的な表現をなくした文章を見せる。

提示された文の一部
ヒロキは死にました。
悲しいなと思いました。
まだ小さなヒロキに綿に含ませた水を飲ませた夜を、覚えています。泣きもせず、母と僕に見守られながら、栄養失調で弟は死にました。とてもかわいそうだなと感じました。

「つらい」「かなしい」と感じたのはなぜか考えよう。
ヒロキが死んでしまったところ
お父さんにヒロキを会わすことができなかったところ

a (活動) a (活動)
r (振り返り) a (見通し)

a (見通し)

a(見通し) : 生徒Aのノートには、登場人物が「死んでしまったところ」「お父さんにヒロキを会わすことができなかったところ」と記述があった。生徒Aは、作品内で描かれるストーリーに着目し、「つらい」「かなしい」と感じていることが分かる。

a(活動) : 授業の前半では、生徒Aと同様に作品内で描かれるストーリーに着目した意見が多く出され、全体で共有した。

「深める」のきらりポイント

ストーリーに関わる意見が学級全体で共有されたところで、教師はストーリーではなく、作品で用いられる表現技法に注目できるように、作品と同じ内容で間接的な表現をなくした文章を生徒に提示した。

r(振り返り) : 生徒Aは、今まで読んできた教科書本文との違いに違和感を抱き、再び考え始めた。

a(見通し) : 自分なりに新たな視点を基に考えを再構築した。

a(活動) : その後、再度全体で交流を行った。教師が提示した違和感のある文章と教科書の本文の違いに着目しながら、比喩表現や間接表現が読者に与える影響について意見交流が行われた。

r(振り返り) : 本時の最後に振り返りを行った。生徒Aは後半の交流で話題に挙がった「比喩表現」に着目しながら「感情を書かずに想いを伝えている」とまとめ、本時の前には気付かなかった視点で「つらい」「かなしい」という感情が伝わってきたことを実感できた。さらに、「先生が見せてくれた文章ももう少しそこを工夫するのいい」と記述し、本時の学びをつなげていこうとする新たな見通しをもつことができている。

単元の「深める」段階における「きらりポイント」の手だてによって生み出された「きらりタイム」によって、生徒Aは考えを大きく更新していることが分かる。そして、手だてによって生み出された新たな「 $r \rightarrow a$ 」によって、1時間の授業の中で二回しのサイクルを生み出すことにつながり、それによって生徒の思考を深める大きなきっかけを生み出していることが分かってきた（前ページ資料9）。

3 成果と課題

成果は大きく二つ挙げられると考える。一つ目の成果として、単元レベルの「AARサイクル」だけでなく、1時間の授業レベルで「aarサイクル」の考え方を取り入れたことによって、生徒自身が学びをつなげていこうとする姿が少しずつ表出するようになってきた。その一例として、今年度の2年生国語科では、平家物語の単元で毎時間振り返りを行い、次に論説文「モアイは語る」の単元に移る流れをとった。その振り返りの中に「平家物語もそうだけど、モアイは語るも昔の人から学ぶことができる」という言葉が出てきた。毎時間振り返り、思考をつなげる活動を繰り返してきたことで、単元と単元をつなぐ思考（「AAR→AAR」）も表出するようになってきた。

二つ目の成果として、教師が「AARサイクル」を意識することで、生徒の思考の変容に寄り添った単元づくり、授業づくりが進むようになった。それに伴って、今年度から生徒の思考をより表現しやすいように単元構想の様式を、次ページ資料10のように大きく変更した。小さな四角の中には子どもの言葉を想定して書き込み、縦の列で一人の生徒の思考のつながりを意識して単元を構想していけるようにした。この単元構想を取り入れたことで、単元を進める中で生徒の振り返りを確認しながら構想図を再検討する教師の姿が見られるようになった。

一方で、課題も二つ挙げられる。一つ目は今年度、単元中盤「深める」の「aarサイクル」についての実践が中心になった。単元序盤「出会う」段階、単元終盤「生かす」段階における「きらりタイム」と「aarサイクル」のつながりについては、今後実践の中で検証していく必要がある。

もう一つの課題は、単元末の「R（振り返り）」を次の単元や生活の中へつなげていくための手だてや工夫を検討していくことである。成果の中で、単元と単元の学びをつなげる子どもの姿を例示したが、あくまで偶発的なものである。何によってそのようなつながりが生まれたのかを分析したり、単元終末に手だてを考え講じたりする中で方法を模索していきたい。

4 おわりに

研究を進めていく中で、どうすれば生徒が「AARサイクル」を回し続けることができるか教師一同検討を重ねてきた。「こうすれば生徒はきっと新たな視点に気付いてくれるのではないか」A見通し、「実際に授業で手だてを講じてみた」A活動、「生徒の反応からすると、今回は別の手だての方がよかったかもしれない。次は変更してみよう」R振り返り→A見通し。教師の営みを振り返ってみると、まさに「AARサイクル」そのものであることに研究を振り返る中で気付くことができた。そして、それは「AARサイクル」が授業という場面だけでなく、さまざまな場面で大切な思考の方法であることをより確かに実感できた瞬間であった。今後も、生徒が自ら学ぶ力を高め、「自ら新たな学びを求め、考えを更新し続ける生徒」となれるように、教師一同、「AARサイクル」を回し続けていきたい。

【資料 10 思考のつながりを意識した単元構想】

1 単元名 物語の結末 「少年の日の思い出」から

2 単元目標

- ・物語の語り手に注目しながら、場面転換の仕組みや情景描写の効果に対する理解を深め、作品の描く内容を読み取ることができる。(知識及び技能)
- ・物語の続きを読み取った内容を根拠に考えたり、仲間の考えを取り入れたりしながら書き進めることができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・考えを伝え合う中で、物語の続きを進んで書き換えようとする。(学びに向かう力、人間性など)

3 単元構想図(12時間完了)

※ ○数字は時間数を示す

単元前の姿：物語は中心人物の心情を正しく読み取っていくことが大切だ。		生徒の活動・生徒の思考の流れ	※教師の支援
出 会 う 2	この物語の続きはどんな話なのだろうか。①② 初読の感想を書き、感想交流から物語の結末に疑問をもつ。	<p>全体的になんとなく暗い印象の強い作品だな。</p> <p>「僕」が盗みをしてしまったことは悪いが、エーメールの対応は冷たい。</p> <p>回想場面がこの</p> <p>嫌を集めるのに</p> <p>は共感できる部</p> <p>悲しい結</p> <p>うな終わり</p>	<p>【出会うきりり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結末の違和感に気づけるようにするため、感想交流で結末に注目している生徒の感想に焦点化し、その疑問を全体で共有する。
	物語の続きを考えるために必要なしっくりくる結末を書くために必要	<p>小さな四角の一つ一つに子どもの思考が書かれています。縦列の四角は単元を通して一人の生徒の思考のつながりをイメージしており、下へ行くほど深まっています。</p> <p>「エーメール」の心情は冷たい印象しかないけど、本当にそうなのかな。</p> <p>そのあたりも考えながら物語の続きを考えていきたいな。</p> <p>「僕」が結果的に盗みをしてしまったことはよくない。</p> <p>ただ「僕」の心情を読み取ると十分反省しているように感じる。</p> <p>結末が回想だから、続きは現代に戻ってくる方がいいな。</p>	<p>※1 何を読み取っていく必要があるかを整理するために、続きを書くために必要な要素を分類して提示する。</p> <p>※2 作品の全体像を全体で共有できるように、場面ごとにタイトルをつける活動を行う。</p> <p>※3 書く内容を共有できるようにするために、続きを書くにあたって必要最低限な型を示す。</p> <p>※4 発言に対するつぶやきを共有できるように、タブレット端末のチャット機能を使う。</p>
深 め る 8	物語の続きを考え、全体で交流しよう。⑥~⑧※3、※4 回想場面の読み取りをもとに、物語の続きを創作し、全体で交流する。	<p>「僕」の悲しい過去を現代に戻ってきたら夜の情景描写で表現してみよう。</p> <p>序盤の「客」の様子から、今はそれほど落ち込んでいないのではないかな。</p> <p>「エーメール」に対する厳しい見方で続きを考えると違和感がある。</p> <p>きっと「客」は落ち込んでいるから、励ます言葉を入れよう。</p> <p>あまり重い雰囲気にならず、共感的に受け止める</p> <p>「僕」が語り手だから「エーメール」にだけ</p> <p>少しずつ朝になる感じと、「客」の心が晴れていくような感じにした。</p> <p>少年時代の話にな</p> <p>現代では、「客」に</p> <p>続きにした。</p>	<p>本時 8 / 12</p> <p>【深めるきりり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語り手の感情に読者が誘導されていることに気づけるように、「エーメール」を擁護する立場の生徒を意図的に指名し、焦点化する。
	全体交流を振り返り、物語の続き全体交流で得た視	<p>横長の四角には単元を進める中、全体で共有される課題や活動が書かれています。生徒の思考のつながりと横長の四角のつながりに無理が生じないように展開を検討しています。</p> <p>※5、※6</p> <p>暗い情景描写は、「客」の話聞いた「私」の心情に置き換えてみよう。</p> <p>考えてみ話をしていたのたら嫌だな。</p> <p>「客」との関係性が少しずつ離れていくような感じに変えてみた。</p> <p>昔と変わらず被害者のような「客」に対して厳しい言葉を取り入れてみた。</p> <p>みんなは最終的にどんな続きに書き換えたのか読んでみたいな。</p>	<p>※5 全体交流の論点を共有しながら推敲ができるように、「私」が「客」に対して思っていることを考えるように伝える。</p> <p>※6 自分の考えの変化を自覚できるように、前回考えた続きのコピーを配付し、変更点を赤で書きこむように伝える。</p>
生 か す 2	みんなが考えた物語の続きを読み合いたい。⑪⑫ それぞれの考えた物語の続きを交流して感想を伝え合う。	<p>「客」に対して自分と同じように距離をとる結末が多いな。前回書いたものと内容が大きく変わっているな。</p> <p>「客」に対して「エーメール」と同じような態度をとる続きが面白かった。表現でつながりをつくるとまとまるな。</p> <p>自分が考えていたことがみんなの作品につながって嬉しかった。でも、みんなが考える続きが違って楽しかった。</p> <p>中には「私」と「客」の関係性を気にして、「客」に対して、表・裏をつくって表現している人もいて、状況としてはすごく共感できる続きもあった。</p> <p>同じように読み取っていても、前半部分と回想部分のつながりを意識して表現の仕方を変えるだけで、読んでいる人の印象は大きく変わるな。</p> <p>最初に読み取ったときと、今ではこの作品に対する見方も、自分の考えた続きも変わって面白かった。語り手を意識すると作品の見方が変わるな。</p>	<p>【生かすきりり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読み取り方しだいで多様な物語に対する見方が変わることを実感できるように、結末交流会を開き、感想交流の場を設定する。
	単元後の姿：語り手の視点から自分たちは作品を読んでいる。語り手側からの理解だけでなく、他の登場人物の視点を取り入れるとより作品と向き合えそうだ。次の作品ではどうかな。		